

時代を『読む』

渡辺 利夫



今年の後藤新平生誕百五十周年に当たり、氏の功績を再検証するシンポジウムや講演会が各地で開かれた。鶴見祐輔著「正伝後藤新平」全八巻が「海知義氏の校訂により藤原書店から刊行されたことは画期的であった。後藤の仕事の中で特筆すべきは台湾の近代化に果たした貢献である。

よみがえる後藤新平

後藤は明治三十一年に第四代台湾総督児玉源太郎とともに総督府民政局長として彼地に赴任し、明治三十九年に満鉄初代総裁として転出するまでの九年間、台湾開発という二世一代の大事業に挑戦した。縦貫鉄道、築港、土地調査の三大事業、開

国への移植のためには、その地の生態に見合った改良を加える必要がある。インフラ、制度、組織の構築のすべてに手腕を振るった。後藤の哲学は「生物学的植民地論」である。個々の生物の生育にはそれぞれ固有の生態的条

件が必要であるから、一国の生物をその本来他国に移植しようとしてもうまくはいかない。他

の経営など不可能だという思想であった。この後藤の考え方がよくあらわれたのが、台湾住民の長い懸望である阿片吸引の禁止であった。下関講和会議で李鴻章は伊藤博文に向かって、貴国は台湾では阿片で手を焼くよ」と捨てぜりふを吐いたというエピソードが残っている。後藤は「漸禁論」を擁して阿片専売制度を設けた。阿片吸引者から阿片を一

挙に取り上げるわけにはいかなかった。阿片販売者を特定商人に限定した。すでに阿片中毒にかかっている者のみに阿片購入の通帳保持を許し、新たな吸引者には通帳は絶対に交付しないこと

にした。阿片価格は旧来に比して高値に設定した。これにより阿片吸引者は漸減し、加えて専売収入の増加にも寄与した。また後藤は、台湾において長い来歴をもつ「保甲」を利用して密度の濃い統治制度を確立した。保甲とは十戸を一甲、十甲を一保として甲長と保長をおき、保甲内の相互監視と連座制を徹底した制度である。戸籍調査、出入者管理、伝染病予防、道路・橋梁建設などすべてがこの保甲を通じてなされた。保甲は日本の台湾統治のための実に効果的な制度として機能した。後藤がなした利目すべき成果が「旧慣」調査とならんで土地・人口調査事業であった。後藤はこの事業をもって経営するべく託された台湾の現状を徹底的に調べ尽くした。土地調査事業には輝かしき先達である。

(拓殖大学学長)